

青年期における異性との友人関係の発達

大井由莉菜・宮本正一

(岐阜大学教育学研究科・岐阜大学教育学部)

キーワード：青年期 異性 友人関係

目的 本研究は、異性との友人関係が青年期を通してどのように発達していくのかを検討することである。

方法 岐阜県内の公立中学校・高校・大学の生徒・学生計461名(男189・女272)に対して、富重(2000)の作成した尺度をもとに作成した質問紙を用い、調査を行った。異性不安尺度、異性対人行動、異性に対する親和指向、将来期待についての質問42項目に回答を求めた。また、好きな人の有無、異性きょうだいの有無の回答も求めた。

結果 それぞれの尺度に関して、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、異性対人行動に関しては「異性に対する日常的行動」因子、「異性に対する積極的行動」因子の2因子が得られた。異性に対する親和指向に関する項目については、「現在の親和指向・他者比較によって評価された親和指向」因子、「経時的比較によって評価された親和指向」因子の2因子が得られた。それぞれの尺度得点が、発達、性差、異性きょうだいの有無、好きな人の有無によってどのように異なるかを検討するために二要因の分散分析を行った。

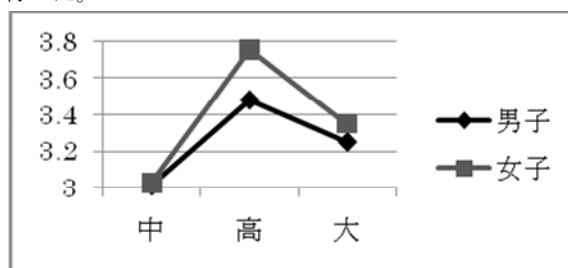


図1 異性不安尺度の平均

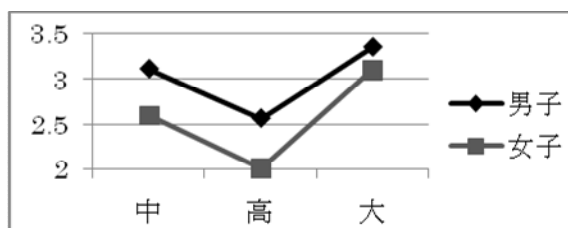


図2 異性に対する日常的行動の頻度の平均

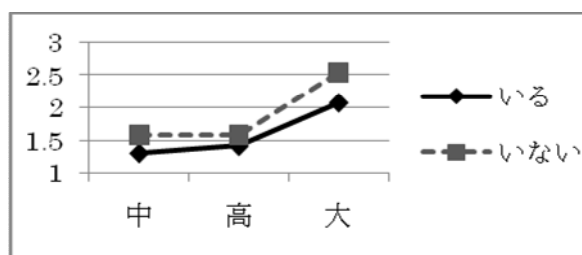


図3 好きな人の有無による異性に対する積極的行動の頻度の平均

考察 図1より、異性不安においては高校生が一番高く、また、どの学校段階においても女子の方が異性不安は高かった。また、図2より、女子はどの学校段階においても、男子

よりも異性に対する日常的行動の頻度が低かった。これらのことから、異性不安が高いほど、異性に対する日常的行動の頻度が低くなるということが考えられる。これは、富重(1996)が明らかにしたように、異性不安傾向が異性との相互作用の回避を動機づけ、異性に関わる機会を逸しているからであると考えられる。異性に対する積極的行動については、男女に大差はなく、中学生と高校生の間にも大差はなかったが、大学生になると男女共に著しく頻度の平均が高くなっていった。そして、異性に対する親和指向に関する項目については、2因子共に、男子は学校段階が上がるにつれて親和指向の高さの平均が高くなっていくという傾向がみられた。

異性きょうだいの有無に関しては、「異性不安」、「異性に対する日常的行動」、「異性に対する積極的行動」に有意差がみられた。異性きょうだいがいることイコール異性に対する免疫が、異性のきょうだいがいない人よりもあり、抵抗が少なくて済むため、異性不安を抱きにくく、異性との対人行動の頻度が高いと予想していたが、本研究での結果は違っていた。異性不安、日常的行動、積極的行動、すべてにおいて異性兄弟のいない群の方がいる群よりも高いという結果が得られた。よって、異性のきょうだいがいても、異性不安を抱きにくいことや対異性の対人関係に抵抗が少ないとはいえないことが分かった。

好きな人の有無に関しては、まず異性不安について、高校生の場合は好きな人がいない群の方が高く、大学生の場合は好きな人がいる群の方が高かった。そして日常的行動については大学生において、積極的行動についてはどの学校段階においても、好きな人がいる群よりいない群の方が頻度は高かった(図3)。これは、好きな人がいると、その相手との関わりを重視しようとするため、他の異性との関わりが減ってしまうからだと考えられる。また、好きな人がいると答えた人の中で、その相手が恋人である可能性がある。そのため、恋人という存在がいるため、他の異性との関わりを避けたり、異性との関わりに制限が生じるということが出てくると予想される。これも、好きな人はいる群よりいない群の方が頻度が高いという結果になった原因のひとつと考えられる。一方、好きな人がいないという人は、恋人の存在を意識することなく他の異性との関わりができるので、好きな人がいる群よりもいない群の方が頻度が高かったと考えられる。また、好きな人がいない群は、異性とよい人間関係を築きたい、異性と知り合うチャンスを必ず生かすことができるといった将来期待が高いため、実際に日常的行動の頻度も高くなっていくのだと考えられる。

本研究から、性別、好きな人の有無別では、大学生になるにつれ、異性対人行動の頻度が高まっていくということから、学校段階が上がるにつれて異性が中心的存在になっていくということがわかった。そして、異性きょうだいがいることが、異性不安を抱きにくいことや対異性との対人行動に抵抗を持たないことにつながるとはいえなかった。

引用文献

富重健一 2000 青年期における異性不安と異性対人行動の関係—異性に対する親和指向に関する他者比較・経時的比較の役割を中心に— 社会心理学研究、15、3、189—199

(Ohi, Yurina & Miyamoto, Masakazu)